注解『七十一番職人歌合』稿（二十四）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第五十一番および第五十二番の注解を収めた。

五十一番　縫物師　組師

〔職人尽〕

〔伝烏丸光広作　職人歌合〕縫物屋　春の空を縫物にして着ん人は飛ぶかりがねを紋に付けてよ　〔人倫訓蒙図彙〕縫物師　諸の衣装、其の外織物に、さまざまの糸をもて、模様を縫いあらはす。縫いに色々の名有り。暖簾に松を描きて印とす。縫薄屋とかく家には紋形のきはばく、摺薄等をもするなり。吉備大臣入唐のとき相伝して来たれりとかや。縫物師の元祖と仰ぐなり。　／　足打　大小の柄糸、具足のおどし糸、是を組む也。手にて糸をさばき組む。目を足にて小さき木刀にて打つゆへに、足打といふ。女のわざなり。又、下緒打あり。是は打ちばんも違い、大方男が打つなり。　〔用明天王職人鑑　職人尽〕さして降らねどもみぢ葉も、時雨の雲に染物屋、染めて上絵屋ぬひ物屋、糸もて通すみすや針、……

〔誹諧職人尽〕　縫物し　紅梅は誰がふれし香のそめ小袖＜前　立甫＞　きそ始め松に柳の糸とめん＜嵐雪妻＞　蝉衣ぬ

ひ物のとし歌こと葉＜一守＞　袖塀の縫ひや朽葉の蔦かづら＜令徳＞　藤よりはさきに暮れけり針の溝＜五啓＞　鴛鴦や水は金沙に流れ行く＜馬光＞　上前（うはまへ）にとまる葉多き胡蝶哉＜永我＞　縫物師出した儘なり五月雨＜珠龍＞　わか芝や観音を縫ふかさのうち＜寥和＞　／　くみし　からくりの九月や花のいとすすき＜蓮外＞　よりて見ん本町二丁目の糸やなぎ＜寥和＞　／　追加　縫物師　しづごころ素縫の菊に伊達はなし＜祇山＞　遅藪入りをうらむ戯れ男＜寥和＞　水々と五日の月のさし出でて＜来至＞　宵講釈をもどる一つれ＜祇山＞　ほととぎすに顔の筋違ふ座頭の坊＜寥和＞　色も匂ひも濃き若葉山＜来至＞　／　仝　組師　姫国の春のひかりや五色いと＜来至＞　**〔今様職人尽百人一首〕**ぬひはくや　天つ風雲のかけ橋縫いとめよ千鳥を裾にしばし散らさん　「お茶あがりませ」「いらぬ事をさつしやります」　**〔彩画職人部類〕**糸組　京都にはじまると云ふ。もとより、糸は婦人の常に取りあつかふものなれば、其の組物それぞれに工夫し、三条糸屋何某が壘に、わかき婦人を多くならべて、其の職を専らとす。買ふ人そこに至つて、其の好むところの組物、即席に組み立てつかはす。京わらんべ、多くつどひあつまる。今も組糸は婦人の職とはなれり。　**〔職人尽発句合〕**三十番右　繍師　縫箔や芥子のひとへの色好み　芥子のひとへに色を好める、若紫のうかれ心なるべき。いづれか秋にあはではつべきと、ふと思ひ合はせて、為持。「袱紗の縫いが、今はむつかしくなりたり」　／　六番右　組物師　火とり虫こがれもつれて糸による　糸組女の、むすぼれて独りこがるるは、いかなるえにしぞ。風情深きや。　**〔職人尽狂歌合〕**右　糸くみ師　なが声の耳にそまれど組む糸の白きを見てもなけ時鳥　……右、墨子の故事につきて、なくといふ詞、おもしろくとりなされたり。持とや申すべからむ。　／　右　糸くみし　嬉しさはいといとくみもほととぎす真紅のふさで待つ夜半に夢　……右、四の句狂じたるさまよろしければ、勝つべくや。　**〔近世職人尽絵詞〕**縫箔屋　むかし、官医の娘、新嫁のとき、はれぎ十二あり。その中に、地赤・地白・地黒、石畳の小袖、鱗形の小袖などあり。石畳は黒地に金の石畳、鱗形は黒地に金の鱗形をひしと置たる也。石畳・鱗形は、その比式正の衣服なりと、孔雀楼筆記にみゆ。今縫箔屋とはいへど、縫物ばかりにて、摺箔はまれなるべし。　「この紋所は、われらがよくかき覚へたるぞ」「このあつらへのぬひものむつかしさ」「さるみやしきのいそぎにて」　**〔宝船桂帆柱〕**縫箔師　ぬひはくの金糸銀糸は手のうちに家繁昌の模様見せたり「総模様の色糸入りは手がかかる、〳〵」

【本文】

五十一番

ぬいもの、うらうすやうの紙までも
すき影しろくすめる月かな
屋おもてにしはし見えつる月影の
せとになるまてふけめくる哉

左、ぬい物のうらにうすやうすきたるまて
さやかなる月、いとめてたし。右は、又、くみにや
面といふくみを、家の面によせて、せとまて月
をめくらす心はせ、よき持なるへし。

さしもわかちきりをきしをこよひまた
たれとぬもの、いともうらめし
恋しぬときく〳〵なをもさまてやと
われをへしきに人のいふなる

左、たれとぬもの、いと、いへるさま、よろし。
右、首尾かなへり。へし木とは、くみの具な
めり。詞にへしきといふは、たゝこと葉なり。
されと、よくよせたれは、猶為持。

◇　◇

ぬいもの、—〔忠〕〔明〕ぬひもの、〔類〕繡の　うらうすやう—〔類〕裏薄やう
すき影しろく—〔類〕すきかけ白く　かな—〔類〕哉
見えつる—〔類〕みえつる
なるまてふけめくる哉—〔類〕成まて更めくるかな
ぬい物—〔忠〕〔明〕ぬひ物〔類〕繡　うすやう—〔類〕薄様
くみにや面といふくみ—〔類〕組にやおもてといふ組
よせて—〔類〕寄て

わかちきりをきしをこよひまた—〔類〕我ちきり置しを今宵又
たれ—〔類〕誰　うらめし—〔類〕恨めし

われ—〔類〕我
たれ—〔類〕誰　よろし—〔類〕宜し
くみ—〔白〕くゝ
たゝこと葉なり—〔類〕たゝ言葉也

（忠寄本の絵および画中詞は、五十番の次に五十二番、
その次に五十一番と順序を誤るが、いまこれを正す。）

ぬい物し
今ころの
ぬい物は、
そめ地に
ぬふほとに、
をそくて。

くみし
たくふくは、
このころめす
人もなき
うたてさよ。

ぬい物し―〔白〕縫物師〔忠〕五十一番縫物師〔明〕〔類〕ぬひ物し
今ころの……をそくて―〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕ナシ

くみし―〔白〕組師〔忠〕組師〔類〕組し
このころ―〔白〕頃〔忠〕頃〔類〕この比

【語注】

◎岩崎佳枝氏によれば、以下第五十一番から七十番までは、本職人歌合の第二部にあたるという（「日本文学に及ぼせる『白氏文集』の一影響―『七十一番職人歌合』の組織構成」＜『東方学』六五号、一九八三年＞）

◎縫物は、ここは刺繍のこと。

組師は、さまざまな色の糸を組み合わせて、組紐を作る職人。組紐は、鎧の威、太刀の緒、直衣や狩衣の袖括り、巻子や軸の結び緒などに用いられた。

縫物師・組師とも、女性の職業であったようである。ただし、縫物師については、柳家本『職人尽図巻』の「ぬい物や」、『人倫訓蒙図彙』の「縫物師」などに見るように、近世の絵には男性が多く描かれている。

◎ぬいものゝうらうすやうの紙　「薄様」は、鳥の子紙を薄く漉いたもの。縫物をするとき裏に張る薄様の紙、の意か。『新大系』付録に、「地布の表（刺繍の裏になる）に薄様紙（鳥の子）を張って糸を刺し易くする。……刺し終えてから張られた紙を丁寧に剥がしていく。手刺繍には、今もこの方法が採られている」という。なお、京都刺繍協同組合理事長、西武史氏の御教示によれば、「現在では、伸び縮みが激しい布、あるいは絞りのように伸ばしてはいけないものに刺繍する場合など、薄い紙を張って布とともに繍うことがあるが、一般的ではない」とのことである。

◎すき影しろくすめる月かな　「薄様の紙までも透き（通す）」から「透き影」と続ける。「透き影」は、物の隙間や薄い物を通して差し込む光。薄様の紙までも透き通して、なお白く澄んだ月影だ、というのである。なお、「透き」に、紙の縁語「漉き」を掛けるか。

◎屋おもて　判詞に言うごとく、「家表（面）」で、家の表の方を言うのであろう。ただし、用例は管見に入らない。組の「矢面」に言い掛けるための造語か。「矢面」は、組の一種かと思われるが、これも用例を見出しえない。『俚言集覧』に、「組糸に亀甲打あり。表裏あり。表と矢面といへる事あり」（「矢面」の項）とあるが、詳細未詳。

◎せとになるまてふけめくる哉　「背戸」は、家の裏口。また、家の後方。「更け巡る」は、夜が更けるとともに月が巡る意であろうが、肖柏の家集『春夢草』中、春歌上の、「いくたびか見ざりし影にうつるらむ更け巡る月の窓の梅が枝」以外、例を見ない言葉。家面にあった月が背戸の方まで巡った、というのであろう。

◎ぬい物のうらにうすやうすきたるまて　縫物の裏に張った薄様の紙を透き通すほど、の意か。意味が取りにくい。

◎くみにや面といふくみを、家の面によせて　「組」は、組紐、また、その作業。「寄す」は、ある事柄を別の事柄に関連づけること。組の「矢面」を「家表（面）」に関連づけて。

◎せとまて月をめくらす心はせ　「心ばせ」は、心のはたらき。感性。家の表から背戸の方まで月を巡らせた表現を、月を長い時間にわたって鑑賞しようという優雅な心の現れだ、と見るのである。

◎さしもわかちきりをきしを　「さし」に、縫物の縁語「刺し」を掛けるか。あれほどまでに私が愛を誓っておいたのに。

◎**たれとぬものゝいともうらめし**　「たれと寝」から「縫物（ぬもの）」と続く。「縫物（ぬもの）」は、「縫物（ぬひもの）」の転か。『後拾遺集』序に、「かの四つの集（万葉・古今・後撰・拾遺）は、ことばぬものゝごとくにて、心海よりも深し」とあり、これについて、『後拾遺抄注』に、「ヌモノハ繡也。ウルハシクハ、ヌモノトヨメリ。世俗ノ詞ニ、ヌヒモノトハ云也。而ヲ、院ノ仰ニテ、教長卿入道被レ書二写後拾遺一之時、此詞不審也。ヌヒモノトアルベキニ、ヒ文字落歟トテ、見二合数本一、皆以同。仍弥懐二疑殆一。顕昭可二勧進一之由、以二広言一被二仰下一之時、ヌモノ、詞可レ然之由注進了時ハ、称二禅門之遺恨一云々」とある。これによって、当時、「ぬひもの」は俗語、「ぬもの」は雅語と考えられていたらしいことが分かる。とはいえ、教長は「ぬもの」という言葉を知らなかったわけであり、その後の文献にも、「ぬもの」という言葉は見出し得ない。そのことからすれば、ここは、ただ、『後拾遺集』序に見える言葉、あるいは、さらに『後拾遺抄注』に注されている言葉、という知識にもとづいて、用いたものであろう。判詞に、「たれとぬもののいとといへるさま、よろし」とあることからすれば、判者もまた、同様の知識を持っていたと思われる。「ぬものの糸」から「いとも恨めし」と続く。他の誰と共寝するのであろうかと思うにつけても、とても恨めしい。

◎**恋しぬときく〳〵なをもさまてやと**　「死ぬ死ぬと聞く聞くだにもあひ見ねば命をいつの世にか残さん＜信明＞」（後撰集、十一、恋三）を本歌とする表現。「恋ひ死ぬ」は、恋いこがれて死ぬこと。「恋ひ死ねとするわざならしむばたまの夜はすがらに夢に見えつつ＜読人しらず＞」（古今集、十一、恋歌一）など、恋の歌にしばしば用いられる言葉。私が恋い死ぬと言っているのをいつも聞いていながら、なお、それほどまでのことがあろうかと思って。

◎**われをへしきに人のいふなる**　「へしき」は「圧しぎ」で、相手を軽蔑した態度を取るさまであろう。用例は管見に入らぬが、「圧しげ」の転であろうか。その「圧しぎ」に「へし木」を掛ける。「へし木」は、判詞にも言うとおり、組の道具であろうが、未考。『中世職人語彙の研究』は、本職人歌合の絵に見える足打台の刀の形をした部分で、さばいた糸をその都度打つ具が「へしき」であろう、という（「へしき」の項）。私のことを見下したように相手の人が言っているということだ。

◎**首尾かなへり**　首尾がよく相応している、というのであろう（五十番語注「首尾いひかなへり」の項参照）。

◎**くみ**　白石本は「くゝ」と読めるが、誤写であろう。

◎**詞にへしきといふは、たゝこと葉なり**　「詞」は、体言に対して、用言の類を指すか。ここは、「へしぎ」を「圧しぎ」の意で用いることをいう。これに近い「ことば」の例に、『長短抄』上の「モノノ名ト詞トサシアウ句、時鳥今夜モナカズアケニケリ。ホトトギスノスト、ナカズノズ、キキニクキナリ」、ロドリゲス『日本語小文典』二の「日本人は日本語の品詞を三つの言葉でまとめている。第一は Na である。これは『名前』という意味の言葉で、この言葉のもとにまとめているのはすべての名詞・接続詞・感嘆詞・前置詞つまり後置詞、それから固有の文字〔漢字〕を持つすべての語――ただし動詞は除く――である。第二は Cotoba である。これは *Verbo* という意味で、この名称でまとめているのは、あらゆる種類の動詞、すなわち結合動詞をはじめその他すべての動詞、それから形容詞的動詞である。第三は Te,Ni,Fa または Te,Ni,Vo,Fa または Sutegana または Vokiji で……」がある。「ただ言葉」は、歌論用語で、歌語・雅語に対して、俗語のこと（十六番語注「たゝこと葉」の項参照）。

◎**よくよせたれは**　「圧しぎ」を「へし木」に、うまく関連づけているので。

◎**今ころのぬい物は、そめ地にぬふほとに、をそくて**　白石本・忠寄本・明暦板本・類従本は、この言葉を脱する。最近は、染地の上に縫物を施すので、より複雑で手間がかかる、というのであろうが、その技術の歴史については、未考。なお、『和国諸職絵尽』の画中詞は、「五色のとり合に口伝ありとしるへし」。

◎**たくふくは、このころめす人もなきうたてさよ**　「たくふく」は、「たくぶく」で、「啄木（たくぼく）」の転であろう。「啄木」は組紐の一種で、さまざまな色の糸でまだらに組んだもの。きつつきが木をついばんだ跡に似ていることから言うという。太刀の下緒や鼓の緒などに用いた。最近は着用する人もなくて残念だ、というが、その流行に関しては、未考。

〔絵〕

縫物師は、垂髪で打掛の右肩を脱ぎ、刺繍台の前に坐し、右手に針を持って刺繍を施す。横に、緑の糸を巻いた糸巻と刺繍針二本。類従本は、打掛の肩を脱がない。白石本・忠寄本・明暦板本・類従本は、横の刺繍針二本を描かな

い。

組師は、垂髪で小袖を着、足打台を用いて、両手で糸をさばき、右足に絡ませた紐を引いて組目を詰める。横に、赤と白の糸を巻いた糸巻。白石本・忠寄本は、台の描き方に小異。白石本は小袖の柄を異にし、類従本は無地。なお、『新大系』付録によれば、足打台は、「能率も悪く場所もとるので、近世以降は廃れたようである。代わって低台・内規台・高台・唐台・綾竹台・平籠台など、比較的簡便な手組が多く使われている」という。

五十二番　摺師　畳紙売

【職人尽】

〔誹諧職人尽〕すり師　石摺のやうに霜置くや菊ばたけ＜貞芙＞　板ずりの手なら足なら雨蛙＜尺子＞　板摺の得手に帆かけんたから船＜佳境＞　はん摺の咲かぬ花見る花見かな＜一尺＞　草花や八重菊小ぎく植字板＜如此＞　山吹のひとへや八重やあはせ板＜寥和＞　／　畳紙うり　初花の売り言葉かなたとふがみ＜雨夕＞　行く秋の夜なべひろげん畳紙＜路道＞　虫干や短冊明ける畳がみ＜佳節＞　桐の葉やたき物姫の畳がみ＜寥和＞

【本文】

五十二番

あきらけき月とはみれとさすか猶
ほりめはくもるすりかた木哉

あきらけき―〔類〕明らけき
すりかた木―〔類〕摺形木

たゝうかみみかきうちたるきりはくの
ひかりことなるあきの夜の月
　ともに、させることなし。可為持。
ゑひすりの花たにましるみむらさき
いつれにうつるひとのこゝろそ
わすれめやき殿にそむるたゝうかみ
しなやかなりし人の手さはり
　左右ともに、歌仙の哥ともみえす。ふと
ころせはし。可為持。

◇　　◇

すりし
梅の花
はかり
するほと、
やすき。

たゝうかみうり
御たゝうかみ
めせ。色もよく
いてきて候そ
とよ。

たゝうかみ―〔忠〕たゝうかみ〔類〕たゝう紙　みかきうちたるきりはく―〔類〕みかき打たる切はく
ひかり―〔類〕光　あきの夜―〔類〕秋のよ
花た―〔類〕花田
ひとの―〔白〕ひ〔類〕人の　こゝろ―〔類〕心
わすれめや―〔類〕忘めや　そむる―〔類〕染る
しなやかなりし―〔類〕しなやか成し
哥―〔類〕うた

すりし―〔忠〕五十二番すりし

するほと―〔尊〕〔明〕〔類〕するほとに〔白〕〔忠〕する程に

たゝうかみうり―〔白〕〔忠〕畳紙〔類〕畳紙うり

色―〔白〕〔忠〕いろ
いてきて候そとよ―〔白〕いてき候そ〔忠〕いてき候そとよ

【語注】

◎摺師は、畳紙売と番いにされていることから、版木などを用いて、紙に模様を摺りつける職人と思われる。『新大系』付録は、「料紙の摺師であるか、襖唐紙の摺師であるかは明瞭ではない。しかし、同じ工房で両種が製されているから、いわゆる唐紙の摺師であることに間違いはない」とする。

畳紙（たたう）は「畳紙（たたみ）」の転。漆や渋を塗った厚紙や染紙に折り目をつけ、四つに畳むようにした小物入れ。絵を描いたり、切箔を施したりしたものもあった。女性が楊枝・櫛・香包みなどを包んで、懐中に入れて持ち歩いた。

摺師・畳紙売ともに、女性が描かれる。

◎**さすか**　副詞の「さすが」に「刺刀（さすが）」を掛けるか。「刺刀」は、腰に差す小刀。また、中世後期からは、懐中する短刀をいう。ここは、細工に用いる小刀か。

◎**ほりめはくもるすりかた木哉**　「摺形木」は、印刷するために模様などを彫った板。版木。（明るい月ではあるが）摺形木の彫り目だけは影になる、というのである。五番本『東北院職人歌合』の判者、経師の月の歌、「いまさらになにさやけしと思ふらむ摺形木なる秋の夜の月」、あるいは、十二番本『東北院職人歌合』二番右、経師の月の歌、「ちびはてて文字かたもなき摺形木こよひの月ぞあらはかさばや」から想を得たか。

◎**みかきうちたるきりはくの**　「切箔」は、小さく切った金銀の箔。それを撒き散らして畳紙の装飾にするのである。「磨き打ちたる」は、磨くような気持ちで打ち延ばした、というほどの意であろう。その切箔のように「光ことなる」と下句に続く。なお、本職人歌合二十七番左、蒔絵師の月の歌、「沃懸地のところどころの切金の光ことなる秋の夜の月」と、ほとんど同工。

◎**ひかりことなるあきの夜の月**　光がことさら美しい秋の夜の月。「天の原おなじ岩戸を出づれども光ことなる秋の夜の月」（山家集、上、秋）などの例がある。

◎**ゑひすり**　「葡萄（えび）刷り」で、葡萄色で刷ることであろう。葡萄色は、葡萄葛（えびかずら）の実の色で、赤みを帯びた紫色。

◎**花たにましるみむらさき**　「花田（縹）」は、もとは露草（つゆくさ）の花で染めた薄い青色をいったが、後には藍を用いて染

めたものをもいうようになった。一方、緑系統の色をいうこともある（以上、『角川古語大辞典』、「はなだ〔縹〈花田〉〕の項）。「みむらさき」は、『日葡辞書』に、「Mimurasaqi.　紫色に染めるのに用いる、ある木の実〔液果〕」といい、『重訂本草綱目啓蒙』三二には、「紫珠は、こむらさきなり。一名、みむらさき　播州」とある。「小紫」は、紫式部の類で、秋、紫色の小果を密集してつける落葉低木。ここは、その実から採った染料、ないしその色を指すか。全体として、花田とみむらさきの両種の染料を混ぜ合わせて葡萄色を出すことがあって、そのことをいうか。あるいは、単に、葡萄色が二種の色が混じったような色だというのか。

◎**いつれにうつるひとのこゝろそ**　「ひとの」は、白石本は「ひ」と、「との」を脱するが誤写であろう。「移る」に、色に染まる意と、人や物に心が引かれる意とを掛ける。同様の掛詞は、「ほのかにもみそめの崎の花の色に移る心を知らせてしかな」（為家集、下、恋）などの例がある。花田とみむらさきと、どちらの色に染まる分からないように、あの人の心は、自分と恋敵とどちらに引かれるのだろうか。

◎**わすれめや**　「忘れめやあふひを草にひきむすび仮寝の野辺の露の曙〈式子内親王〉」（新古今集、三、夏歌）のように、多く歌の初句に用いられる言葉。「めや」は、反語的に意思を表す。忘れることがあろうか。

◎**き殿**　城殿。内裏（現京都御所）の西にあって、扇や畳紙などの小間物を製造販売した店の屋号。後世の『京雀跡追』八に、「鷹司通……き殿と云扇や有けれ共、今はみへず。此東に、たとうかみ屋有、品々也。き殿と云」（『角川古語大辞典』「城殿」の項による）と見え、また、『京羽二重』一「鷹司通」の項に、「此通に城殿とて、眉作・たゝう紙・はりこやうの物あり」、同六「畳紙師」の項に、「下長者町新町西へ入、城殿和泉、……烏丸下立売上町、城殿出雲」と見える。

◎**しなやかなりし人の手さはり**　「しなやか」、「手ざはり」ともに、和歌には用いない言葉。

◎**歌仙の哥ともみえす**　「歌仙」は歌の名人。ここは、単に、大した歌でないというのか。あるいは、左右両首の実作者が、当時歌仙と称せられていた事実があったか。

◎**ふところせはし**　五番語注「ふところせばき」の項参照。なお、そこでは、「『懐狭し』という用例は、他の文献

では管見に入らない」と書いたが、その後、近世の例ではあるが、『職人尽発句合』珠数引の句「千万の数こぼれけり柿の臺」に対する判詞に、「珠数引が、数こぼれけりとばかり、詞たらず。ふところせまし」とあるのに気づいた。

◎梅の花はかりするほと、やすき　「するほと」は、他本は「するほと（程）に」。底本の誤脱であろう。「梅の花」とあるが、絵に描かれるところは、青の花びら様のものを散らした模様で、この言葉と一致しない。

◎たゝうかみうり　白石本・忠寄本は、単に「畳紙」とするが、誤脱であろう。

◎色もよくいてきて候そとよ　白石本は、「いろもよくいてき候そとよ」。「いてき候」は、畳紙を売っている場面としてはやや不自然な表現で、「て」の誤脱であろう。また、「候ぞ」でも意味は通じるが、これも「とよ」の誤脱であろう。「ぞとよ」は、相手に念を押す気持ちを表す文末表現。色も具合よく仕上がっていますよ。

〔絵〕

摺師は、頭巾様のものを被って、小袖に襷を掛け腕を捲くり、版木に紙を重ねて、青の花びら様の模様を摺り出す。左に、容器三つ。（ただし、一番手前の一つは、あるいは、金銀箔などを散らすための篩か。）染料や刷毛が見える。右に、印刷前の紙、一折と一枚。類従本は、版木の上の紙は白紙。

畳紙売は、頭巾様のものを被り小袖を着、両手に畳紙を持つ。前に、畳紙を入れたと思われる箱。